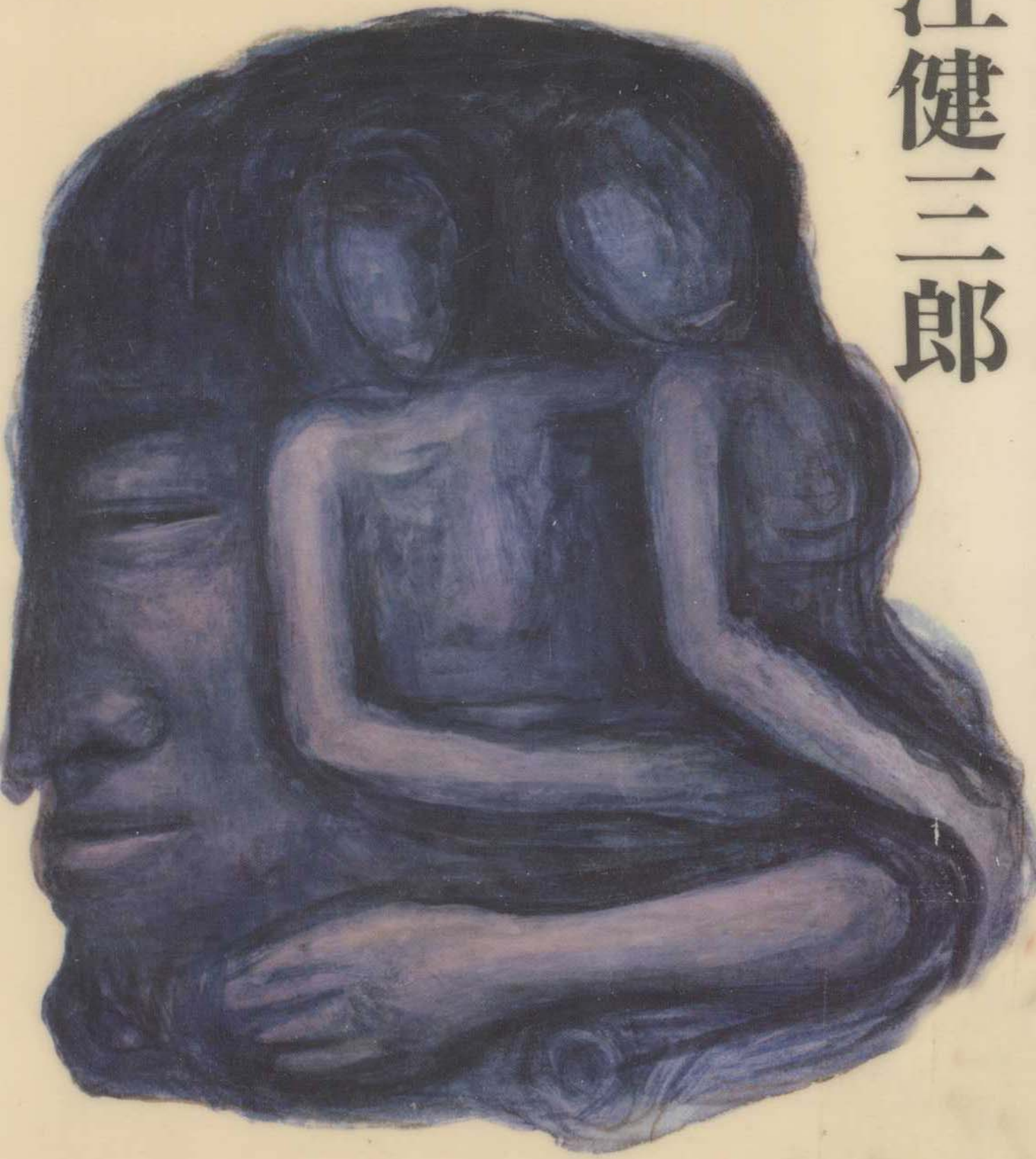
個人的な体験

大江健三郎



新潮文庫

個人的な体験

定価320円

新潮文庫 草126=10

昭和五十六年二月十五日印刷
昭和五十六年二月二十五日発行

著者 大江健三郎

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社
郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)(二六六)五一一一
編集部(〇三)(二六六)五四二一
振替東京四一八〇八番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

㊗ 印刷・株式会社光邦 製本・憲専堂製本株式会社
© Kenzaburô Ôe 1981 Printed in Japan

新潮文庫

個人的な体験

大江健三郎著

新潮社版

2694

個人的な体験

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

1

鳥は、野生の鹿のようにも昂然と優雅に陳列棚におさまっている、立派なアフリカ地図を見おろして、抑制した小さい嘆息をもらした。制服のブラウスからのぞく頸や腕に寒イボをたてた書店員たちは、とくに鳥の嘆息に注意をはらいはしなかった。夕暮が深まり、地表をおおう大気から、死んだ巨人の体温のように、夏のはじめの熱気がすっかり脱落してしまったところだ。誰もが、その皮膚にわずかにのこっている昼間のあたたかさの記憶を無意識のうす暗がりのなかで手さぐりする身ぶりをしては、あいまいな嘆息をもらしている。六月、午後六時半、市街にはすでに汗をかいているものはいない。しかし、鳥の妻は、ゴム布の上に裸で横たわり、撃たれて落下する雉子のように眼を硬くつむって、体じゅうのありとある汗穴から、厖大な数の汗粒をにじみださせ、痛みと不安と期待に呻き声をあげているだろう。

鳥は身震いして、地図の細部に眼をこらした。アフリカをめぐる海は、冬の夜明けの晴れわたった空のように涙ぐましいブルーで刷られている。緯度、経度ともコンパスでひかれたメカニックな線でなく、画家の人間らしい不安定と余裕とを感じとらせる肉太な線で表現されている。それはアイヴォリイ・ブラックだ。アフリカ大陸は、うつむいた男の頭蓋骨の形に似ている。この大頭の男は、コアラとカモノハシとカンガルーの土地オーストラリアを、憂わしげな伏眼で見て

いる。地図の下の隅の人口分布を示す小さなアフリカは腐蝕しはじめている死んだ頭に似ているし、交通関係を示す小さなアフリカは皮膚を剝いで毛細血管をすっかりあらわにした傷ましい頭だ。それらはともに、なまなましく暴力的な変死の印象をよびおこす。

「陳列からとりだしてお眼にかけますか？」

「いや、ぼくがほしいのは、これではなくて、ミシュランの西アフリカ図と、中央および南アフリカ図です」と鳥はいった。

書店員が、様ざまな種類のミシュラン自動車旅行者用地図がぎっしりつまった書棚に屈みこんでせわしげに探しはじめると、鳥はいかにもアフリカ通らしく、

「番号は、182と155です」と声をかけた。

かれが嘆息しながら見つめていたのは、ずっしりした置物みたいな総皮装の世界全図の一ページだった。かれは数週間前すでに、その豪華本の値段を確かめてみたが、それは、予備校教師としてのかれの給料の五箇月分にあたる。臨時の通訳の収入をいれるなら、三箇月で、鳥はそれを手に入れることができるだろう。しかし、鳥は、かれ自身と妻と、そしていま、存在しはじめようとしているものとを、養わねばならない。かれは家庭の首長だ。

書店員は赤い紙表紙の地図を二種類選びだして陳列棚の上においた。彼女は小さく汚れた掌をもっていて、その指は灌木にすがりついているカメレオンの肢さながらの卑しさだった。その指がふれている地図のマーク、輪まわしのやり方でタイヤを押しながら走っている蛙じみたゴム人間のマークに眼をとめて、鳥はつまらない買物をしているという気分になった。しかしそれは重

要な実用地図なのだ。鳥（バード）は、いま買おうとしている地図とはちがう、陳列棚のなかの贅沢（ぜいたく）な地図のことを未練がましく訊（たず）ねてみた。

「なぜこの世界全図は、いつもアフリカのページがひらかれてあるんです？」

書店員は、なんとなく警戒して黙っていた。

なぜこれは、いつもアフリカのページがひらかれてあるのだろう？　と鳥（バード）は自問自答をはじめた。書店主がこの本のうちアフリカのページがもっとも美しいと考えているわけだろうか？　しかし、アフリカのように、めまぐるしく変化しつつある大陸の地図は、その古びかたも早い。そこから世界全図の総体への侵蝕がはじまるのだ。したがってアフリカの地図のページをひらいておくことは、この世界全図の古さを端的に広告してしまうことになるだろう。それでは政治関係がすっかり固定してしまって、もう決して古びない大陸の地図としては、どこを選ぶべきだろうか。アメリカ大陸、それも北アメリカ大陸？　鳥（バード）は、その自問自答を途中でやめて、赤い表紙のふたつのアフリカ地図を買うと、肥りすぎの裸婦のブロンズとモンスター・ツリイの鉢うえのあいだの通路をうつむいて通りすぎ階段を降りた。ブロンズの下腹は欲求不満な連中の掌の脂にまみれ犬の鼻のように濡れた光をはなっていた。鳥（バード）もまた学生の時分、そこに指をふれて通りすぎていたものだったが、いまはブロンズをまっすぐ見つめる勇気さえもたなかった。裸で横たわっているかれの妻の脇で、医師と看護婦たちが、それぞれ肱（ひじ）までむきだした腕を消毒液でザブザブ洗っているところをかれは覗（のぞ）いてしまったのだった。医師の腕はすっかり毛むくじゃらだった。

混雑している一階の雑誌売場をぬけるとき、鳥（バード）は、地図をくるんだハトロン紙包みを、注意深

く背広の外ポケットにさしこみ、腕でおさえて歩いた。それは、鳥がはじめて買った、実用向きのアフリカ地図だった。しかし、おれが現実にアフリカの土地を踏み、濃いサン・グラスをかけてアフリカの空を見あげる日はおとずれるだろうか？　と鳥は不安な思いで考えた。むしろおれは、いま、この瞬間にもアフリカへ出発する可能性を決定的にうしないつつあるのではないか？　すなわち、おれは、いま、自分の青春の唯一で最後のめざましい緊張にみちた機会に、やむなく別れをつげつつあるのではないか？　もしそうだとしても、しかし、もうそれをまぬがれることはできない。

鳥は憤ろしげに荒あらしく洋書店の扉をおして初夏の夕暮の舗道に出た。空気の汚れと薄暗がりのせいで霧にとざされたような感じの舗道。厚表紙の新着洋書をならべてある飾り窓の中で螢光燈をとりかえていた電気工事夫が鳥の前に背を屈めて跳び降りてきたので、鳥は驚いて一歩退り、そのまま暗く翳っている広いガラス窓のなかの自分自身、短距離ランナーほどのスピードで老けこみつつある自分自身を眺めた。鳥、かれは二十七歳と四箇月だ。かれが鳥という渾名でよばれるようになったのは十五歳のころだった。それ以来かれはずっと鳥だ、いま飾り窓のガラスの暗い墨色をした湖にぎこちない恰好で水死体のように浮んでいる現在のかれも、なお鳥に似ている。鳥は小柄で、痩せっぽちだ。かれの友人たちは大学を卒業して就職したとたんに肥りはじめ、それでもなお痩せていた連中さえ結婚すると肥ったけれども、鳥ひとりは、幾分腹がふくれてきただけで痩せたままだった。かれはいつも肩をそびやかして前屈みに歩く、立ちどまっている時もおなじ姿勢だった。それは運動家タイプの痩せた老人の感じだ。かれのそびやかした肩は

閉じられた翼のようだし、容貌自体、鳥をしのばせる。すべすべして皺ひとつない渋色の鼻梁はクチバシのように張って力強く彎曲しているし、眼球はニカワ色のかたく鈍い光をたたえて、ほとんど感情をあらわすことがない。ただ、時どき、驚いたように激しく見ひらかれるだけだ。唇はいつもひきしめられて薄く硬く、頬から顎にかけては鋭くとがっている。そして、赤っぽく炎のように燃えたって空にむかっている髪。鳥は十五歳のとき、すでにこのままの顔をしていた、二十歳でもそうだった。かれはいつまで鳥のようであるのだろう？　十五歳から六十歳にいたるまで、おなじ顔、おなじ姿勢で、生きるほかない、そのような種類の人間なのか？　そうだとすれば、鳥はいま、飾り窓のガラスのなかにかれの全生涯をつうじてのかれ自身を眺めているのだった。鳥は嘔きたくなるほど切実に具体的な嫌悪感におそわれて身震いした。かれはひとつの啓示をうけた気分だった、疲れはてて子沢山の老いぼれ鳥……

その時、ガラスの奥のほの昏い湖のなかを、どこか確実に奇妙なところのある女が、鳥にむかって近づいてきた。肩幅のがっしりした大女で、ガラスに映っている鳥の頭の上にその顔がでるほどの背の高さだった。鳥は背後から怪物に襲撃されたような気分で、つい身がまえながらふりかえった。女はかれのすぐ前に立ちどまって、穿鑿するように真剣な表情で、鳥をしげしげと見つめていた。緊張した鳥もまた、女を見かえした。一瞬あと、鳥は女の眼の中の硬く尖った緊急なものが憂わしげな無関心の水に洗いさられるのを見た。女は鳥にたいして、それがどのような性質のものであるかは判然としないにしてもともかく一種の利害関係のきずなを発見しかけていたのだが、不意に、鳥が、そのきずなにふさわしい対象ではないことに気づいたのだ。その時に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

なって鳥の方でも、ふさふさとカールした豊かすぎるほどの髪につつまれたフラ・アンジェリコの受胎告知図の天使みたいな顔の異常、とくに上唇に剃りのこされた数本の髭を見出した。それはすさまじい厚化粧の壁をつらぬいてとびだし、たよりなげに震えている。

「やあ！」と大女は闊達に響く若い男の声で、軽率な失敗に自分自身閉口しているといった挨拶をした。それは感じがよかった。

「やあ！」と鳥は急いで微笑して、これもかれを鳥じみた印象にする属性のひとつの、いくらか嗄れた甲高い声で挨拶をかえした。

男娼がそのままハイヒールの踵で半回転してゆったりと歩み去るのをちょっと見送り、その逆の方向に鳥は歩きだした。鳥は狭い路地をぬけ、都電の通っている広い舗道を、注意深く警戒しながら渡って行った。時どき痙攣的なほどにも激しくなる鳥の神経過敏な要心深さもまた、怯えて気のくるいかけた小っぽけな鳥のことを思わせる。とにかく鳥という渾名はかれによく似合っている。

あいつは、飾り窓に自分を映してみながら誰かを待ちうけている様子のおれを、性倒錯者とまちがえたわけだ、と鳥は考えた。それは不名誉な誤解だが、ふりかえったかれを見て、男娼が、ただちにその誤解に気がついた以上、かれの名誉は回復されたのである。そこで鳥は、いまその滑稽感だけを楽しんでいた。やあ！　というのはあの際じつにしっくりした挨拶ではないか。あいつは相当に知的な人間にちがいない。鳥は大女に扮した若者に突発的な友情を感じた。今夜あの若者は、うまい具合に、性倒錯者を見つけだして鴨にすることができるだろうか？　むしろ、

おれが勇気をふるいおこして、かれについて行くべきだったかもしれない。鳥（バード）は、自分があの男娼と二人で、どこかのわけのわからないおかしな隅っこに入りこんでいったのだったら、と空想しながら、舗道を渡りきって酒場や軽飲食店のならぶ盛り場の一郭へ入りこんで行った。あの男とおれとは、兄弟のように仲良く裸で寝そべって話しあうだろう。おれまで裸になっているのはあの男を窮屈な気持から救うためだ。おれはいま妻が出産しつつあるということをうちあけるだろう。また、おれがずいぶん前からアフリカを旅行したいと考えており、その旅行のあと〝アフリカの空〟という冒険記を出版することが、夢のまた夢であることを話すだろう。そして、いったん妻が出産し、おれが家族の檻（おり）に閉じこめられたなら（現に結婚以来、おれはその檻のなかにいるのだが、まだ檻の蓋はひらいているようだった。しかし生れてくる子供がその蓋をガチリとおろしてしまうわけだ）おれにはもうアフリカへひとりで旅に出ることなどまったく不可能になるということを話すだろう。あの男は、おれを脅かしているノイローゼの種子のひと粒ひと粒を丹念にひろいあつめて理解してくれるにちがいない。なぜなら、自分の内部の歪（ゆが）みに忠実であろうとして、ついには女装して性倒錯の仲間を街にさがしもとめるにいたった、そういう若者は、無意識の深い奥底に根をはる不安や恐怖感に本当に鋭敏な眼と耳と心とをもった種族であろうからだ。

明日の朝、あいつとおれとはラジオのニュースでも聞きながら、むかいあって髭を剃ることになったかもしれない、ひとつのシャボン壺を使って。あいつはまだ若かったが、それにしては髭の濃さそうな男だったから、と鳥（バード）は考え、そこで空想の鎖を切って微笑した。あいつと一緒に夜

をすごすのは無理にしても、一杯だけ飲みに誘うべきだった。鳥はいま軒なみにこぢんまりした安酒場のならぶ通りを、酔っぱらいが幾人もはいりこんでいる雑踏にまぎれて歩いていた。かれは喉が渇いていて自分だけでも、一杯飲みたい気分だった。鳥は痩せて長い頸を素早くめぐらして通りの両側の酒場を物色した。しかし、実際のところかれは、どの酒場にも入ってゆくつもりはなかった。もし、かれがアルコールの匂いをぷんぷんたてて、妻と新生児のベッド脇にかけつけたとしたら、かれの義母はどのような反応を示すだろう！　鳥は、義母のみならず義父にも、アルコール飲料にとらえられた自分を再び見せたくなかった。停年まで義父は、鳥が卒業した官立大学の英文学科の主任教授だった。そしていま、私立大学に移って講座をひらいている。鳥が、かれの年齢で予備校の教師のポストをえることができたのは、幸運というより、義父の好意のたまものなのだ。鳥は、義父を愛していたし、畏怖してもいた。かれは鳥が出会った、もっとも巨大なところのある老人だった。鳥はかれをあらためて失望させたくなかった。

鳥は二十五歳の五月に結婚したが、その夏、四週間のあいだ、ウイスキーを飲みつづけた。突然かれは、アルコールの海を漂流しはじめたのだ。かれは泥酔したロビンソン・クルーソーだった。鳥は大学院学生としてのすべての義務を放擲し、アルバイトもかれ自身の勉強も、なにもかも棄ててかえりみず、深夜はなおさらのこと真昼のあいだも、暗くしたリヴィング・キッチンでレコードを聴きながら、ただウイスキーを飲んでいた。いまとなっては、あの最悪の日々鳥は、ウイスキーを飲んで音楽を聴くことと酔いつぶれて辛い眠りを眠ることのほかに、生きている人間らしい行為をなにひとつしなかったような気がする。四週間後、かれは七百時間もつづいた深

く苦渋にみちた酔いから蘇り、戦火にまみれた都市ほどにも荒廃しきった、惨めな醒めた自分を見出した。鳥はほんのわずかな復活の見こみしかない精神的禁治産者として、かれの内部の曠野はもとより、かれをとりまく外部との関係の曠野を開拓しなおす試みをはじめねばならなかった。

鳥は大学院に退学届をだし、義父に予備校の教師のポストを探してもらった。それから二年たっていま、かれは、妻の出産をむかえようとしているのである。その鳥が再びアルコールの毒に血を汚して妻の病室にあらわれたなら、義母は、その娘と孫とをひきつれて死にものぐるいの勢いで逃げうせるにちがいない！

鳥自身、自分のなかにいまも残る隠微ながら根強いアルコールへの指向を警戒していた。ウイスキーの地獄の四週間以来、かれはなぜ、自分が七百時間も酔いつづけたのかをくりかえし考えてきたが、確たる理由にたどりつけたことはなかった。自分がなぜウイスキーの深淵にもぐりこんだのかわからない以上、再び、不意にそこへ立ち戻ってしまう危険は、つねにのこされているわけだ。鳥が、あの四週間の真の意味を理解していないあいだは、新しい惨めな四週間から身をまもる防禦手段もまた、かれのものになってはいない。

鳥はかれがつねに熱中して読むアフリカ関係書のひとつの探検史で、このような一節に出会った、《探検家たちが例外なく語る村人たちの泥酔騒ぎは、今もあり、そのことは今もなおこの美しい国の生活には何か欠けるものがあること、絶望的な自暴自棄へ人々を追いこむ根源的な不満があることを示している》。これはスーダンの荒野の集落の村人たちについての言葉だが、それを読んで鳥は、自分自身の生活の内なる何か欠けるものと根源的な不満について徹底して考えて

みることを自分が避けていることに思い到った。しかしそれらは確実に存在するのだから、そこで鳥はいま注意深くアルコール飲料を拒んでいるのである。

鳥は、その放射状の盛り場の焦点にあたるもっとも奥の広場に出た。正面の大劇場の電光時計は七時を指している。病院の義母に電話をかけて産婦の安否を問う時間だ。かれは午後三時から一時間ごとに電話をかけてきたのだった。鳥はあたりを見まわした。広場の周囲にいくつもの公衆電話があったが、それらはすべてふさがっている。鳥は妻の出産の進み具合についてよりもむしろ、受付の入院患者専用の電話のまえにたたずんで、かれからの連絡を待っている義母の神経のことを考えて苛いらした。その病院に娘を運びこんで以来ずっと義母は、自分がそこで不当に侮蔑的な待遇をうけているという固定観念にとらえられているのだった。あの電話を他の患者の家族が占拠していればいいんだが、と鳥はあわれな望みをかけた。それから鳥は通りをひきかえして酒場や喫茶店、お汁粉屋、中華そば屋、とんかつ屋、洋品店などなどを物色した。それらのひとつに入りこんで、電話を借りるという手があるわけだ。しかしできることなら酒場は避けたかったし、すでに食事も終えていた。胃薬でも買うことにしようか？

鳥は薬屋を探して歩いて行き、四つ角に面した風変りな店の前に出た。その店の庇には、腰をおとして身がまえ拳銃を発射しようとしているカウ・ボーイの巨大な絵看板が吊りさげられている。鳥は、カウ・ボーイの拍車つき長靴が踏みしだいているインディアンの頭にしるされた、《ガン・コーナー》という飾り文字を読んだ。店内には紙の万国旗と黄や緑のモールがはりめぐらされた下に極彩色の箱型の装置がいちめんに並べられ、鳥よりもずっと若い連中がしきりに右

往左往している。鳥は赤と藍のカラー・テープでふちどりしたガラス戸ごしに店内を見わたし、奥の隅に、朱色の電話機が置かれているのを確かめた。

鳥はすでに流行遅れのロックン・ロールを叫びたてているジューク・ボックスとコカ・コーラ自動販売機のあいだをぬけて、乾いた泥に汚れている板張りの店内に入りこんで行った。たちまち耳の奥で花火がとどろきはじめたような具合だ。鳥は、スロット・マシーンや投げ矢、それに箱のなかの風景のミニアチュアを狙ってライフル銃を撃つ装置（ミニアチュアの森かげを、茶色の鹿や白いウサギ、緑の巨大なカエルなどが小さなベルト・コンベアにのって動いている。鳥がその脇をとおりすぎるとき、上機嫌で笑っている女友達に見守られた高校生がカエルを一匹撃ち、装置の手前の点数表示器は5点加算した）などと、それらにむらがるハイ・ティーンたちのあいだを迷路を歩くように苦労しながらすりぬけて電話機にたどりついた。鳥は、硬貨を差しこむと、すでに暗記してしまった病院の番号をダイヤルした。かれは片方の耳に、遠方でコールする音を、そしてもう片方の耳に、ロックン・ロールと、一万匹の蟹がそろって駈ける足音を聴いた。遊び道具に夢中のハイ・ティーンたちが、毛ばだった床板を、手袋みたいに柔らかいイタリアン・シューズの底で、しきりにこすりつけている響き。義母はこの喧噪をいったいなんだと思うだろう？　電話の時間に遅れたことと共に、この騒音についても弁解すべきだろうか？

コールする音が四度きこえたあと、妻の声をいくらか幼なくしたような義母の声が答えた。鳥は、結局なにひとつ弁解せず、すぐさま妻の安否を訊ねた。

「まだです、まだ生れてきません、あの子は死ぬほど苦しんでいるのに、まだです。まだ生れて

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com